

[ 参考事項 ]

新技術名：県内各地から分離されたリンゴ褐斑病菌のベンズイミダゾール系殺菌剤に対する薬剤感受性（平成16年）

研究機関名 果樹試験場環境部病害担当  
担当者 佐藤 裕・深谷 雅子

[ 要約 ] 平成16年に、県内18園地から採取し分離したリンゴ褐斑病菌について、ベンズイミダゾール系殺菌剤に対する薬剤感受性検定を行った。その結果、本剤耐性菌が10園地で認められた。検出圃場は県全域に分布し、耐性菌密度が非常に高い園地もあった。

[ ねらい ]

ベンズイミダゾール系薬剤耐性リンゴ褐斑病菌は平成10年、本邦で初めて、県内の1園地で確認されているが、県内での耐性菌の広がりには不明であった。そこで、県内各地から採集し、本系統薬剤に対する感受性検定を行う。

[ 技術の内容・特徴 ]

ベンズイミダゾール系殺菌剤としてベノミル剤（ベンレート水和剤）を供試した。

- 1) 採集した18圃場のうち、10圃場(55.6%)からベノミル耐性菌が検出され、その地域は県北部から県南部までの広い地域で認められた。
- 2) 耐性菌が検出された10圃場の内、5圃場では分離菌株すべてが耐性菌であった。
- 3) 合計91菌株の分離株中、ほぼ半分の44菌株(48.4%)が耐性菌と判断された。

以上の結果から、6年前には12園地中、1園地のみであったが、今回の調査でベンズイミダゾール系薬剤耐性リンゴ褐斑病菌は県内に広く分布していることが明らかになった。

[ 対象範囲 ]

リンゴ生産地全域

[ 普及・参考上の留意事項 ]

- 1) 今後は本剤の使用過多を防止する。
- 2) 本病の一次感染期である落花期ころからの防除法（平成13年度実用化できる試験研究成果に掲載）を積極的に導入する。
- 3) 降雨が連続すると予想される場合には散布間隔を短縮する。
- 4) 散布もれを防ぐため、薬剤のかかりやすい樹姿や樹高などの栽培管理にも配慮する。

[ 具体的なデータ等 ]

第 1 表 褐斑病菌のベノミル剤に対する感受性 ( 2004 年 )

調査地点	試菌株数	M I C 値 (ppm)											
		0	《0.1	《0.2	《0.39	《0.8	《1.56	《3.125	《6.25	《12.5	《25	《50	《100
大館市	1	1											
鹿角市	1									1			
山本町A	2		2										
山本町B	3	3											
秋田市	5										5		
西目町A	12								1	11			
西目町B	9									9			
美郷町	9									9			
横手市A	1		1										
横手市B	7	3								4			
増田町A	3	3											
増田町B	2	1	1										
平鹿町A	5	3	1							1			
平鹿町B	8	6	1							1			
平鹿町C	4	4											
平鹿町D	3	2								1			
平鹿町E	6	6											
湯沢市	10	7	2							1			
合計	91	<u>39</u>	<u>8</u>							<u>1</u>	<u>43</u>		
	(100)	( 51.6% )								( 48.4% )			

[ 発表文献等 ]

平成17年度 日本植物病理学会 東北部会に発表予定